

研究ノート

中国西南少数民族の竹屋、木屋住居

李 偉

一、竹造住居

(1) 西双版纳タイ族竹造住居

(2) 瑞麗タイ族竹造住居

二、木造住居

キーワード：中国、西南地域、少数民族の住居

これまでの中国少数民族に関する研究は、そのほとんどが各専攻、各自領域の研究をまとめた著書とか論文などで作られてきた。それらは特に歴史、民俗、建築という視点からの先行研究が多く、西南地域の少数民族だけでもまた多くの先行研究が成されている。ただし、もろもろの領域を貫く総合的な研究は少なく、特に現象の奥にある住居文化に関する探求も少ない。その先行研究のなか、西南師範大学の藍勇教授の著書『西南歴史文化地理』と中国社会科学院民族文学研究所の羅漢田教授の著書『中国少数民族住居文化』は、西南地域少数民族における多数の住居に関する文化現象、歴史の流れなどを記述しており、住居文化を探求する先行研究といえる。

本文は西南地域少数民族の住居文化という視点から、1996年から1999年までの間、8回で合計180日に渡り、中国少数民族の集居地である西南地域に住む32個民族に対して、現地調査を行い、それぞれの民族が置かれた自然環境や伝統的歴史・文化を総合的に分析した結果、その中の竹、木屋は人類建築史における特別な芸術形態であり、当地の各民族の豊かな文化も含ま

れている。本文はそれについて、探索しようと思う。

一、竹造住居

竹造住居は主に雲南省西南部の西双版纳タイ族自治州・徳宏タイ族チンポー族自治州・耿馬タイ族ワ族自治県・孟連タイ族ラフ族ワ族自治県・新平イ族自治県・元江ハニ族イ族タイ族自治県等地に分布している。これらの地域は、気温が高く、十分な降雨量があるため、季節を問わず樹が茂っている。河川が交じり合い、土壌が肥えており、耕作に適している。竹造住居は、一般的に河川の沿岸や溪流の近辺、湖の周りに竹が茂り、樹が林立した中に建てられている。

タイ族は森林や樹木を大切にする良い伝統を持っており、森を生活の場としてきた。彼らは、森の中の大木を「神霊」として祭り、成長周期が最も短く、経済的で実用的な竹を住居の建築材料としてきた。住居の柱・壁・梁・床はすべて竹の丸太や竹の板を使用しており、屋根は竹編みで覆っている。竹は軽くて滑らかであり、通気性に優れているだけではなく、成長が速くて経済的である。このような利点により、これらの地域に暮らす人々の住居に、竹は今も欠かせない存在となっている。

タイ族の竹造住居には強烈な民族特性が現れている一方、またそれぞれの村落の地理的・気候的条件が異なることによる地域的な差異も見

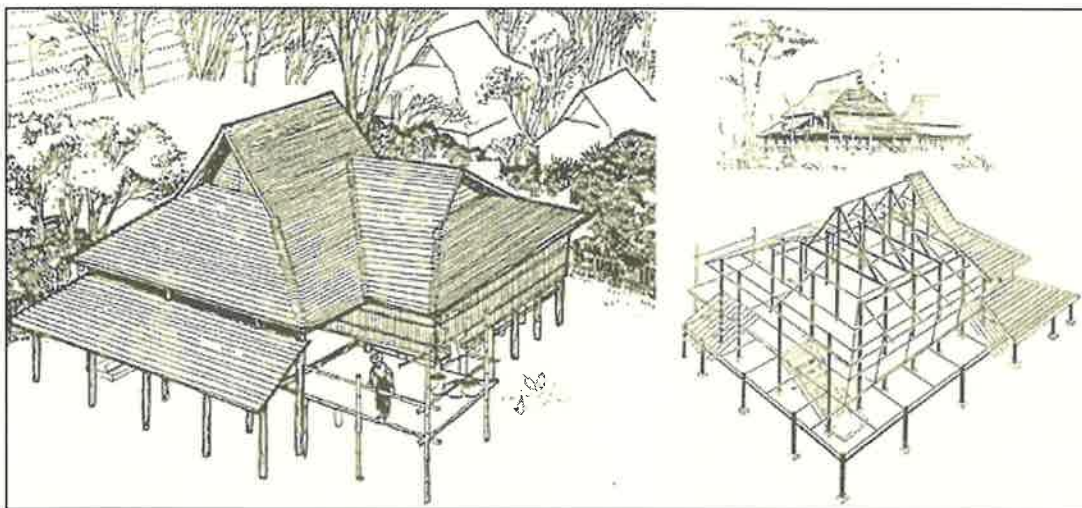


図1

られる。例えば、西双版纳地域は地勢が平坦で、溪谷が交わり、温暖な気候と豊富な資源を持っているのに対し、徳宏地域は平原と山地の間に位置し、地勢・気候の変化が大きく、また耿馬・孟連地域は丘陵地帯に位置する。このような地勢と気候の差異により、各地域のタイ族住居の構造・空間構成・外部造型・室内装飾の各分野において、差異が生じている。

(1) 西双版纳タイ族竹造住居

平面上、各辺が10メートルの正方形に近い。階段を登ると廊下と晒台が繋がっているのが見える。その廊下の傍らに居間があり、居間を回ると寝室に入るが、住居内に神棚はない。廊下・居間・寝室は、居間を接点に「L」字形に構成されており、言い換えれば、側面に入り口を持つ「表に居間、裏に寝室」という構成になっている。廊下は部屋に入る時に必ず通る場所であるという意味で、「前廊」とも呼ばれている。前廊は室内外の結界であり、外側に低い仕切りを持ち、上には直射日光と雨を避けになっている軒が伸び出て、明るく通気性の良い半閉鎖半開放の空間を形成している。前廊は通路として機能するほか、椅子や座敷が設けられ、日中の

涼み・食事・家事・紡織・接客など、居間の延長として多様な機能も果たしている。晒台は四角い床面が敷かれただけで、仕切りもない極めてシンプルな作りになっているが、生活には欠かせない多目的空間である。

柱と梁は丸太の木を使い、壁には木または竹の板を使っている。外壁は若干外向きに傾いており、窓はない。屋根には一般的に陶製の薄い瓦を葺いているが、一部草葺きもある。屋根の背中が短く、傾斜が激しい。その傾斜面は二段に分かれており、頂上の部分がより険しい。軒が長く伸び出ているため、建築全体に日陰を作っている。軒は跳ね上げられず直線形に作られ、装飾が施されていない。西双版纳タイ族の住居構造を見ると、巨大な屋根の下に広がる素朴な立体空間構成における、自然美と新鮮な創造性を感じられる。多くの柱に支えられた床上の堅実な空間と、床下に広がっている開放空間は、強烈な虚実と陰陽のコントラストを醸し出し、周りも緑豊かな庭を抱えて味わい深い空間を演出している⁽¹⁾。(図1、2)

他に、無規則の平面形態を持った住居もあり、その場合には二つの屋根を横に並べて交わっている。そして、四角い建物の横に倉庫用の建物



図2 1985年雲南省赶摆坝タイ族集落

を建てて、晒台で繋げたものもある。

(2) 瑞麗タイ族竹造住居

一般的に、前に南北に縦長い干欄があり、その後ろに一階建ての建物が横たわっているような構成となっている。南の階段を登ると前廊と晒台があり、北に居間がある。居間には神龕と家神が祭られている。居間を通して更に北に入ると、東側に寝室があり、西側には後ろの一階建ての建物の降りるための階段がある。一階建ての建物は台所として使われており、干欄の下にある米・食料の貯蔵庫、家畜の小屋に直接通じる。台所が独立した空間構成により、台所の煙が居間を汚すこともなく、また太陽光が充分に利用できる。居間は南北に開口部が設けられており、通気性に優れている。また、居間の東西に窓を設けたり、西側にバルコニーを設ける

ことにより、更に通気性を図る住居もある。

瑞麗タイ族住居は、一般的に入口・居間・寝室が前後に繋がる「表に居間、裏に寝室」の平面構造をなしており、その他に、居間の傍らにいくつかの寝室を付け加えたものもある。

瑞麗は竹の産地であり、昔は建物の柱・梁・床・壁を全部竹で作っていたのだが、最近では竹と木を組み合わせて使用している。壁は竹箴の表裏材質の相違を利用して、装飾文様を作り上げている。(図3・4)

以上、竹造住居の共通の特徴をまとめると以下ようになる。1) タイ族住居の室内装飾はとてもシンプルであり、ほとんど家具を置かず、高床に直接座る。寝室にはベッドがなく、幕で仕切っているだけである。家族だけのプライベート空間となっている。2) 床には一般的に、丸太の竹を縦に割り、押し平げ、竹箴や藤蔓で編

ㄨ (1) 干欄式：昔からの「人間が上、家畜が下に住む」との思想で作られた住居形式である。この言葉は中国魏

晋時代『魏書』(1,600年前)の古書に初めて出現する。



図3・4 1998年徳宏州タイ族集落



図5 1994年雲南省怒江県独竜集落



図6 永寧県ナシ族摩梭人木楞屋

んだ簣を敷く。雲南省西双版纳のあるタイ族村人の話によると、洪水が頻繁なこの地域では、洪水の際に竹簣を外して水の浮力を減らし、洪水が去るとまた敷きなおすという。徳宏地域のタイ族住居は竹簣の上にまた清潔で涼しい竹席を敷く。3) 竈はタイ族住居の重要な部分である。竈は炊事と暖房の役割をはたすと同時に、家族の日常生活行動の中心となっている。タイ族人が新しい住居を建てて移り込むときに、最初の重要なことが竈を安置することである。竈は必ず二本の神柱の間に据え、村の中で最も尊敬される人が竈の安置を指揮する。同時に竈神を祭る盛大な儀式も行われ、家内安全と一家の幸せを祈り、入居する。居住中、竈周辺のもの

は勝手に動かしたりしない⁽²⁾。

タイ族以外にも、この一帯に居住するワ族・イ族・チンポー族・ラフ族・プーラン族・トールン族も竹造住居に住む。民族により住居の形態・構成に違いがあるが、その違いは各民族の自然環境・歴史文化・伝統文化の違いによるものと考えられる。

二、木造住居

木造建築は、世界古代建築史上一つの独立した体系を形成した建築であり、中国に広く分布している。その中でも中国西南地域におけるトン族の干欄式・ミャオ族とトジャ族の吊脚楼・

(2) 西双版纳と徳宏地域における調査によると、「火神」を祭ることには二つの意味がある。一つは、タイ族が生活に多くの便宜をもたらした火を生命の象徴として崇拝していることを意味し、もう一つは、タイ族が彼

らの生息地である森と竹造住居を大切にしているために、火事を恐れ、特に火の用心を心にかけていることを意味している。



図7 トン族吊脚楼、「庇蔭」羅漢田著、1998年



図8 1996年雲南省孟連県ワ族集落



図9 貴州ミャオ族集落、「庇蔭」羅漢田著、1998年

リス族の千脚落地式・プミ族の木楞房・ヌー族とトールン族の木垛房・ナシ族摩梭人⁽²⁾の木羅子房などの木造住居には、人類木造建築上の多くの貴重な知恵が伝わる⁽³⁾。(図5、6)

トン族は主に貴州省と廣西チワン族自治区の辺境地域に暮らしている。百越族群の多くの民族と同様に、トン族の住居はまだ干欄式である。雲南省の少数民族と比べ、トン族の住居地は漢民族の住居地に近い。住居建築はほとんど全て木造構造となっており、上層まで柱が一本化し、懸山式屋根には瓦が葺かれている点で、漢民族との共通点が見られる。トン族住居は、一般的に3間、一部5間の、三階建てである。最下部の層は、木の板で囲まれた倉庫と家畜小屋であ

り、階段が室内または室外から直接二階に通じる。二階は居住区であり、大きな居間、台所、小さ居間の一面の壁は、人間の背の高さの半分ぐらいの高さのところから上が完全開放式に開かれ、上記の前廊の役割を果たしている。方角的には最も眺めが良いところを選ぶ。接客のほかには、この場所は日常特に使われることない。家族が日常食事をし、団欒する場所は台所である。トン族は居間には物を積置きしたりすると、財産や人口が増えないと信じている。そのため、財産と人口を迎え入れているという意味で、開口部にドアを設けないか、またはドアを常に開けっ放しにしている。一方、敷居を非常に高くしているが、それは家内の財産や人口が外に流

(3) 摩梭人：四川省と雲南省の間にある瀘沽湖の周辺に暮らしている。ナシ族の一つの分枝であり、現在も母

系氏族の風習を保っており、家族の中に父親を持たない。人類社会発展の「活きた化石」と呼ばれている。



図10 2001年雲南省玉竜雪山ナシ族集落

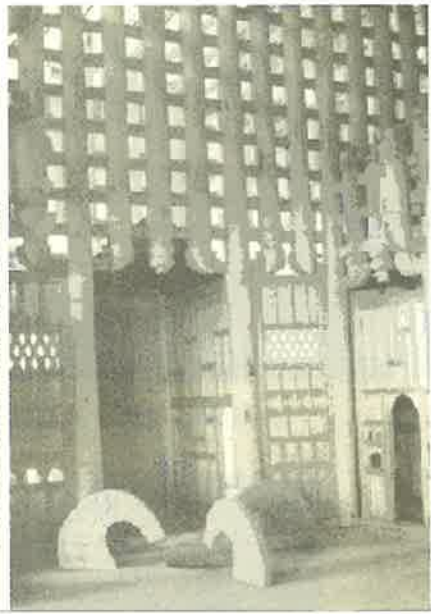


図11 1994年涼山イ族博物館

れていくことを防ぐためだそうだ。三階には子供部屋と貯蔵庫がある⁽⁴⁾。(図12・13)

トン族の住居は自由で豊かな表情を持っている。壁面には短い一つや二つの披檐（ひさし）がある。二階には一部突出した壁があるが、そのような壁にも披檐が付けられている。山の傾斜面に位置しているトン族の村では、住居の建物が自然に不均一な高さに跳ね踊るような演出がなされており、突起や披檐のある壁面は日陰の芸術効果を生み出し、更に犬鶏水車の音と組み合わせ、濃厚な詩情を醸し出している。

トン族村には、いわゆる城壁がなく、村の入り口に寨門が設けられている。寨門は村の結界として、悪霊を払い、村人の結束を示すものである。寨門は一般的に二階建ての懸山式屋根がついた建物になっている。

トン族は西南地域の多くの少数民族と同様に、私有概念が薄い。山地生活の中で平地は大変貴

重な資源であるため、トン族人は住居に囲いを作らず、村の最も良い場所を公共の場所として提供している。村の祭り・議事・コミュニティは、みなこの「鼓楼」と呼ばれる公共の場所で行われる。(図14)

鼓楼はどの村にも必ず供わっている場所であり、1座以上の鼓楼を持つ村もある。調査によると、トン族の鼓楼は現在合計500座あり、トン族の建築文化の重要な一部として重視されている。トン族鼓楼は、その様式により塔式と庁式の二種類に分けられる。

(1) 塔式鼓楼は、外見上タワーに似ている。頂上部は亭の形をした冠を被され、変化に富んだ造型と華麗な装飾が特徴的である。楼閣内は階層に分かれておらず、頂上に登るための細い階段があるだけである。頂上には太鼓が置かれ、警報や集会の知らせのときに叩かれる。太鼓の音は数キロ先まで届くそうだ。(図15)

(4) 門を設けない習慣は、トン族社会において良い社会風紀と道徳観念が保たれているために受け継がれることができたとも考えられる。敷居が高いのは財産が外

に流れないようにとは言われているが、実は子供が遊んでいて引っ掛かることを防ぐ実用的な機能もある。

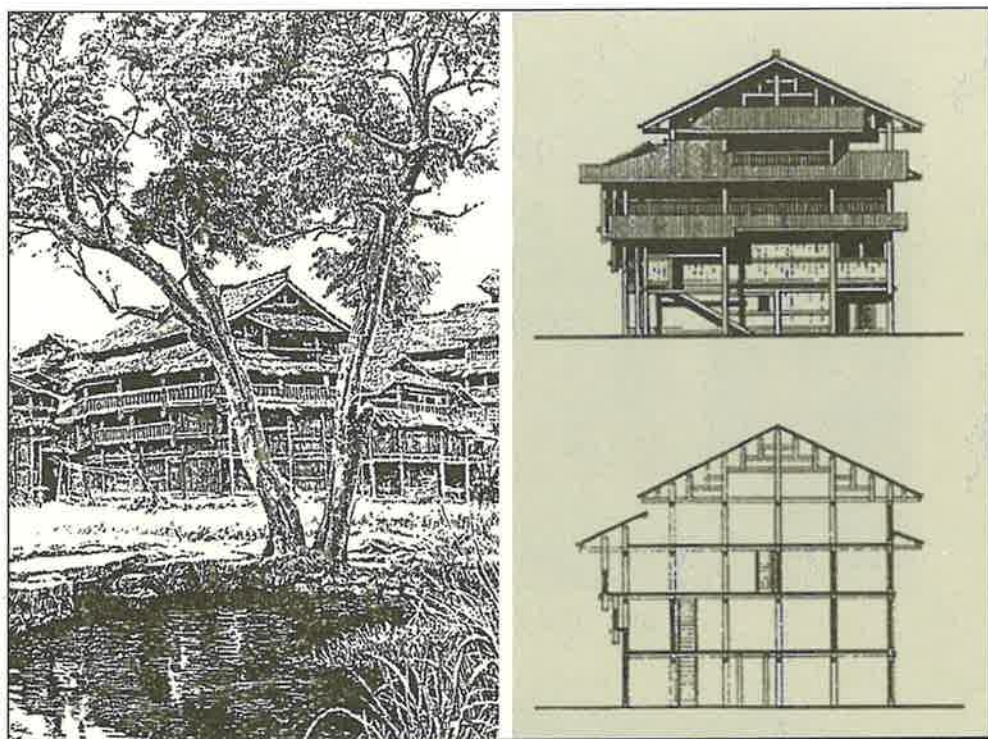


図12・13 1998年鳳凰城、木造住居結構図

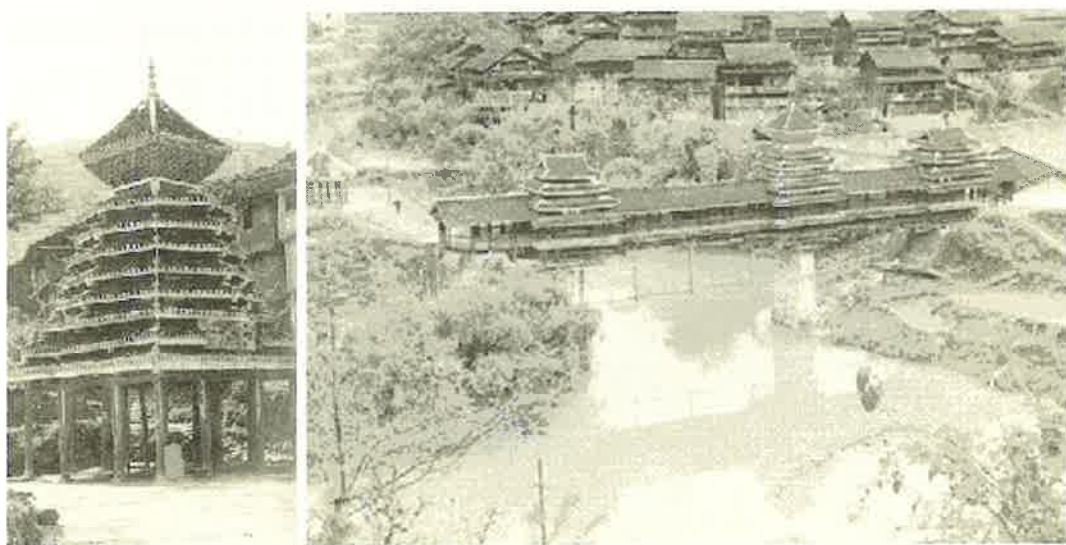


図14・15 1998年鳳凰城風雨橋

(2) 庁堂式鼓楼は比較的にシンプルである。経済的に裕福でない村が採用しており、講堂式に建てられた一階建ての建物である。

鼓楼には民族文化が蓄積されている。そもそ

も鼓楼は一階建てで楼ではなかった。鼓楼という呼称も漢民族が付けた名前であり、トン族の固有の呼び名は「タンワ」または「タンカ」である。「タン」は「堂」であり民衆を意味する。



図16 1998年黔南トン族集落



図17 1998年黔南トン族集落

「ワ」「カ」は話し合うことを意味し、合わせる
と公共議事堂のことをいう。また「ファンスン」
とも呼ぶが、これは村の魂を意味する。このよ
うな呼称から、鼓楼は村の大事を論議したり、
人々の日常紛争を処理したりするトン族の「法」
の象徴であり、また芦籠舞（伝統踊り）・秀侗

戯（伝統劇）・搶花炮（ゲーム）などあらゆる
文化活動が行われる場所でもある。（図16・17）

明代末期（1604～1650）の「赤雅」の描写に
よると、トン族の鼓楼は彼らの大木に対する崇
拝の現れである。トン族人の伝説によると、鼓
楼は「杉樹王」の様子を真似て造られ、高く聳

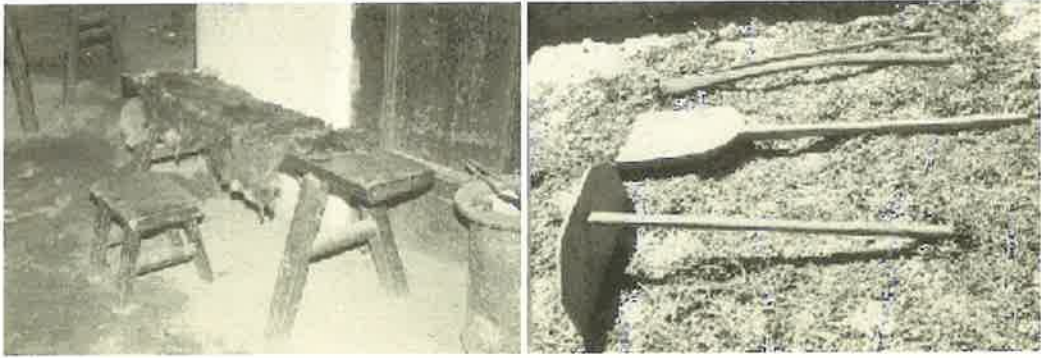


図18・19 木制生活用品図、1994年汶川県ロップ集落

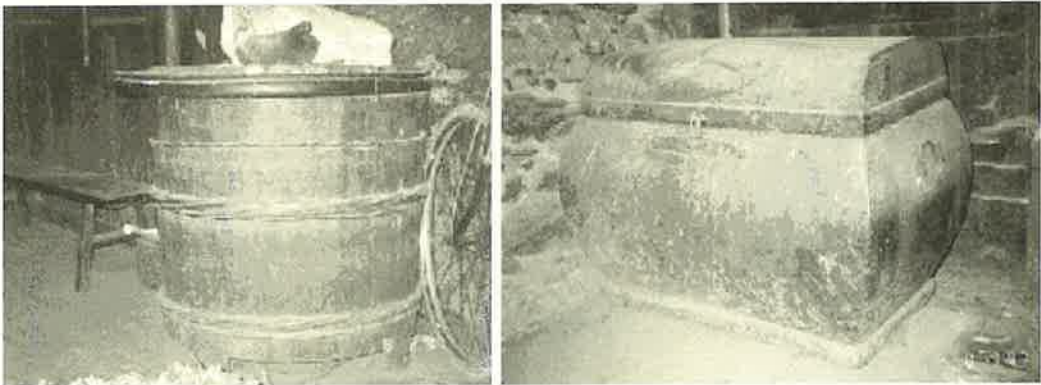


図20・21 木制生活用品図、1994年汶川県ロップ集落

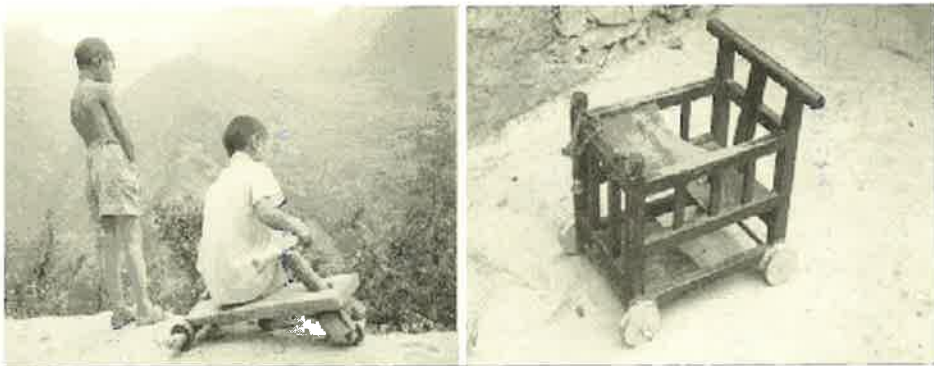


図22・23 木制生活用品図、1994年汶川県ロップ集落)

えた雄大な体型、縦に重なる檐、樹の冠を想像させる亭式頂上などの特徴から、まさに「大木の記念碑」である。この鼓楼建築は、人類の一部が「樹居→巢居→干欄」の住居発展を遂げてきたという説を証明する良いサンプルでもある。

西南少数民族地域では、木材が建築だけではなく、多くの生活用品にも使われている。近年、少数民族人口の急増により、森林資源が減少しており、そのために、森林資源を節約しながらも、民族文化を伝承できる新しい住居建築を模



図24・25 木制生活用品図、1994年汶川県ロッパ集落

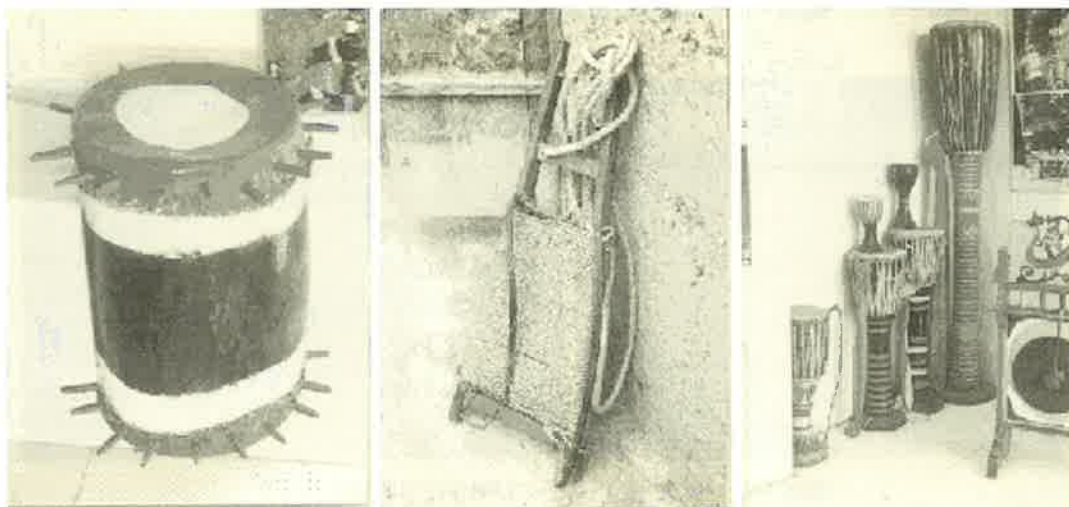


図26・27

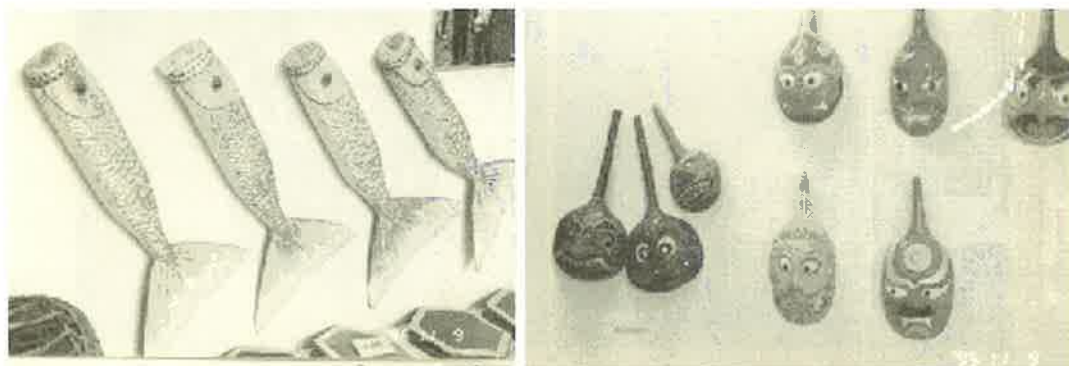


図28・29



図30・31

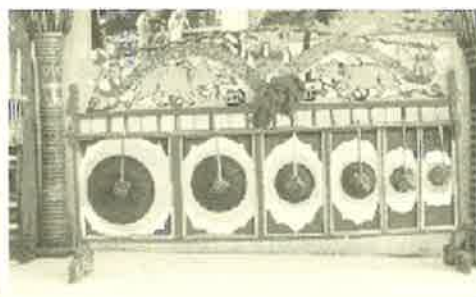




図32・33

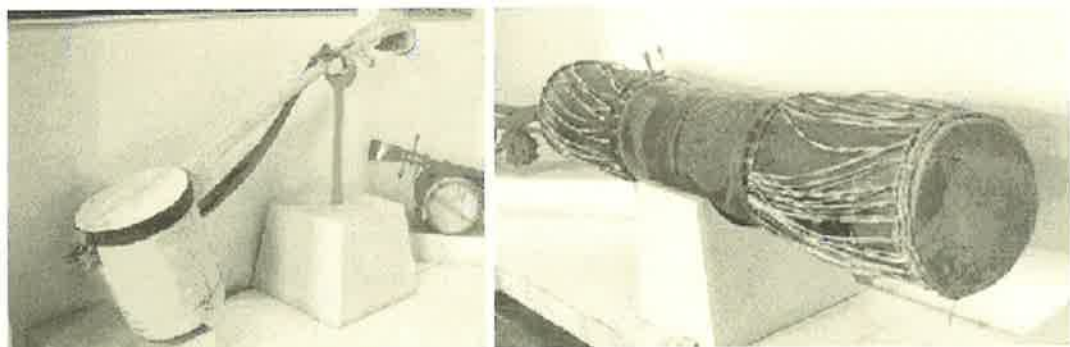


図34・35 1994年雲南省孟連県ワ族博物館

索している。(図18～35)

坝区住居文化（海拔1,000～500メートル）：タイ族・チワン族・ブイ族・スイ族などは百越族群の壮侗語族に属する。これらの民族が生活する坝区や溪谷は、地勢が低く土壌が肥えており、土層が厚くて灌漑に適する。亜熱帯季節風性の気候で、夏が長く冬が短い。年降雨量が1,000～1,700ミリメートルもあり、年間四季の区別はないが、雨季ははっきりしている。百越族群の分布は、中国の東南沿海から西南地域まで、さらには東南アジアに及ぶ。彼らの共通な生活環境の特徴は、湿っぽく暑い沿岸地域と平原地域である。住居は干欄式が多く、水神を崇拝し、生活の中に仏教的なイメージが濃厚に映されている。

以上をまとめてみると、少数民族の住居文化は単なる住居建築の様式ではなく、その背景にある宇宙観・人生観・生活観・価値観などが、

彼らの生活の哲学として反映されており、人類の数千年における自然への適応と共存の意識がはっきりと映された、生活の記録とも言える存在であることが明らかになった。

小論は、中国西南地域の少数民族の住居文化に関する初めての研究ということもあって、研究不足なところが数多くあることを否めない。しかし、将来のこの領域の研究に対して、信頼するに値する基礎データを提供することができるはずである。

この原稿執筆と完成にあたり、数多くの先達の業績を参考にさせていただいた。記して謝意を表したい。とりわけ、多忙を押して多くの助言を賜った宮崎清教授（日本・千葉大学教授）、また、翻訳を快く引き受けてくださった曾和英子氏（同大学博士）、並びに彭宇氏（同大学博士前期課程）には衷心からお礼を申し上げたい。

